

(第一回)

2022(令和4)年度入学試験問題

国 語

(試験時間：50分)

《注 意》

- (1) 問題は

一

 ～

三

 まであります。
- (2) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (3) 受験番号、氏名を忘れずに記入してください。
- (4) 解答に際して、句読点・符号などが含まれる場合には1字分として数えます。

城 西 大 学 附 属

城 西 高 等 学 校

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

まず、どんなときに自分が大事な人間だと思えるか。いちばんわかりやすいのは、「役に立つ」と言われることです。

ここで、「赤鼻のトナカイ」(J・マークス詩／新田宣夫訳詩)という歌を思い出してみてください。子どもから大人まで、最低三回は歌ったことがあると思われる、有名なクリスマスソングですから、みなさんご存知ですね。

トナカイは鼻が赤いという理由でいじめられて、いつも泣いていました。ところがクリスマスの夜に、サンタのおじさんがこう言うのです。「暗い夜道はピカピカの／お前の鼻が役に立つのさ」と。そこでトナカイさんは「^①今宵こそは」と喜んだわけですね。

「役に立つ」というこの感覚は、自分が大事な人間であると思える、たしかな理由の一つです。これはどちらかというと ^{※1}very good に近いですね。

「ジリツ」にも大きく分けてふたつあって、「何かができる」ということと、「ゆだねる」ということの、両方があります。

まず、「^②何かができる」というのは、たとえば、仕事ができる、勉強ができる、ピアノを上手に弾くことができる、人よりも速く走ることができる。あるいは私がいるおかげで、学校の合唱コンクールでクラスがいい成績をおさめることができる。私がリレーの選手だから、体育祭でクラスを勝たせることができる。

あるいは、クラスのヒーローみたいに目立つことはなくても、絵が得意だから学級新聞のイラストを頼まれる。料理が好きで上手にできるから、家庭科の時間にちよつと尊敬される。地味な目立たない子なんだけど、お ^{あ~~~~}ソウジは手際よくていねいにやるから、じつは男子生徒の間ではひそかに人気がある。

このように、役に立つ、何かができるということは、自己肯定感の原点になります。

これは非常に大切で、たとえば学校であれば、たしかな学力も大事な支えになるのです。「学力は大事だ」ということが、何となく社会的に言いにくい ^{ふんいき}雰囲気 ^{ほしゅうめい}がこしばらくは続いています。でも、いまの社会は厳しいですから、正社員の募集にたくさん応募がきたときに、やはり能力のある人を選ぶ。能力というのはただ毎日をだらだら過ごしていた人にはつきません。そのためにも、勉強やスポーツ、美術や音楽でも何でもいいのですが、何かを一生懸命やって「^{いっしょうけんめい}学び」を得ることは本当に大切なことなのです。

ようするに、勉強でもなんでも「何かを努力して、一生懸命やったこと」によって能力をつけることが、自己肯定感という心の安定を得るいちばんの近道です。いちばんの近道といっても、その距離 ^{きより}

は長いのです。A でたどりつける道ではありません。

1

たとえば私も、どんなに温かい心を持って人の力になりたいと思っても、もし医学部に入ることができずに、医師国家試験に合格しなければ、この仕事はできません。やはり、つらくて厳しい受験勉強だったけれども、頑張^{がんば}って勉強して大学に入ったこと、そしてそのあと医師国家試験に合格して資格を得ることができて初めて、こういう仕事ができるわけです。もつと遊びたい、もつと趣味^{しゅみ}に時間を使いたいと思っても、それを諦^{あきら}めて努力しなければならぬ。やはり相応^ふの代償^{だいぎやう}は必要になります。勉強や練習はたしかにつらいけど、それを我慢^{がまん}してやる期間というのは必要なのです。

2

ただしこれにも限界はあります。役に立つときはOKなのです。役に立つから、僕は生きていていいんだと思える。しかし役に立たなくなつたときにどうしたらいいのでしょうか。

たとえば私がここにボールペンを持っているのは、ボールペンがものを書くのに役に立つからです。だからインクがなくなれば、このボールペンは捨てて、新しいものを買いにいきます。

これが人間ならどうでしょうか。役に立たなくなつたら価値はなくなるのでしょうか。「いや、モノと人間は違^{ちが}うよ」と多くの人は言うと思います。でも、ある意味でインクの切れたボールペンと同じなのです。わかりやすい例がプロ野球選手です。プロ野球選手は、選手として活躍^{かつやく}できる間だけ、その世界にすることができなのです。活躍ができなくなつたら、戦力外通告を受けて、追い出されるわけです。プロスポーツの世界は厳しいですから、役に立つときはそこにいられるけれども、そうではなくなつたらいられなくなるのです。

3

これはほんの一例ですが、プロスポーツの世界に限らず、私たちの社会も資本主義社会ですから、仕事ができる人はいけれども、仕事ができない、あるいはできなくなつたらそこにとどまれないというのが多くの場合現実です。会社の経営が厳しくなっていけば、リストラをして人数を減らさなければいけないわけです。

多少景気がよくなつてきたとはいえ、これだけ百円ショップがどんどんできたり、百円でハンバーガーが食べられたりすると、企業^{きぎやう}は商品^{しやうひん}を安く、テキキョウするといふこの競争に勝ち残っていくために、いかに人件費その他のコストを安く抑^{おさ}えるかということに汲々^{きつぎやうきつぎやう}としているのです。

少し話が脱線^{だつせん}しましたが、「それでも役に立たなくなつた場合どうするか」というところに話を戻^{もど}したいと思います。

「ジリツ」を漢字で書くと、「自立」と「自律」³の二種類があります。

自分で何ができるのが、「自立」です。ところが、終末期の人たちは、自分でできなくなります。自分で立てなくなるわけですから。歩けなくなり、だんだん食事でもできなくなり、眠^{ねむ}っている時間が

増えて、やがてお迎えが来るのです。このように、健康を損なうことで、やがてできなくなっていくのが「自立」です。

しかし「自律」のほうは、最後までできます。「自律」は、さまざまな選択肢の中から、自分で選ぶことができるということだからです。選ぶことができる、ということが援助になります。

4

医療の現場の例でいえば、歩くことが難しくなり、トイレまで歩けなくなったとします。元氣なときは自分の行きたいときに、誰にも邪魔されずにトイレに行けたのに、病氣をすると自分で行けなくなります。これは「自立」を失うわけです。ところが「自律」の場合は、さまざまな排泄方法という選択肢のなかで、どういう方法にするかを選ぶことができるわけです。

昼間は車椅子で看護師さんに連れていってもらい、夜はポータブルトイレにするとか、排泄の方法を自ら選ぶことができるという意味では、自立は失っても自律は最後まで失わずにすむのです。

大事なことは、子どもでも大人でも、お年寄りでも、一人の人間として生活する中で、選ぶことができるということ、援助として考えていくということです。「もう動けないんだからオムツですね」というふうに勝手に決めつけてはいけません。

一人の人間としてその人が、苦しみの中にあつてなお人として扱われることが大事です。排泄という大切な本人の選択肢を、本人が選ぶ **B** がある。それは援助として非常に大切なことなのです。

自分でそれまでできたことができなくなることは、すごく苦しいことです。でも、自分のかわりに、心から信頼できる誰かにゆだねる。自分自身でやるのではなく、その大事な自分で選ぶことを手放すことができる。ここになお自己決定できる自由があり、手放すという選択肢を選ぶのです。

その、ゆだねることのできる信頼できる誰かというのは、人間かもしれないし、運命かもしれないし、神や仏というその人にとっての人間を超えたものかもしれません。それを選んだときに、もう何があっても、一切をゆだねることができれば、おだやかさを取り戻すことができるのです。

5

それは決してあきらめたということではありません。信頼のできる誰かに自分の一切をゆだねたときに与えられる、たしかな支えなのです。

この辺の感覚はしかしとても難しいのです。そのかわり、これがもし育まれたときに、その人の支えは本当にキョウコなものになります。

（小澤竹俊 『いのちはなぜ大切なのか』）

※ 1 very good…筆者は「very good」（自分のことをとてもよいと思えるかどうか）と、「good enough」（自分はこれでよい）という二つの考え方を重要視している。

※ 2 汲々と…そのことをするのに精一杯で、他を顧みる余裕がないことを表す。

問一 ～～部 a～e のカタカナを漢字に、漢字の読みはひらがなで答えなさい。

問二 ―― 部①「今宵こそは」とあるが、その下に入ると考えられる言葉を自分で考え、五字以上十字以内で答えなさい。

問三 ―― 部②「何かができる」の具体的な例としてふさわしくないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いつも欠かさずに、部室の片付けとゴミ捨てをしている。

イ 足を怪我したクラスメイトの手伝いを率先して行っている。

ウ 自分で目覚ましをセットして、毎日早起きをしている。

エ サッカーの試合で、誰よりも多くゴールにつながるパスをしている。

問四 空欄 A にあてはまる言葉としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 因果応報 イ 一朝一夕 ウ 孤立無援 エ 天衣無縫

問五 ―― 部③「自律」とあるが、自律においては何が重要視されているか。本文中から四十五字で抜き出し、はじめと終わりの五字を答えなさい。

問六 空欄 B にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本能 イ 自由 ウ 権利 エ 必要

問七 「自立」と「自律」の説明として正しいものには○、間違っているものには×と答えなさい。

ア 「自立」と「自律」は連動しているため、「自立」ができなくなると「自律」も同様にできなくなっていく。

イ 「自立」と「自律」に共通して言えることとして、自らが選択するという点が挙げられる。

ウ 「自立」は失われることがあるが、「自律」は方法を選ぶことができる限り、失わずにいられる。

エ 「自立」は最後までできるが、「自律」はほとんどの場合できなくなることが多い。

問八 次の一文を本文中に入れるとすれば、どこが適切か。 1 5 の中から一つ選び、数字を答えなさい。

厳しいけれどこれが現実です。

問九 筆者の考えとしてふさわしくないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分がやりたいことを我慢して努力を重ねることによって、自己肯定感を高める結果を得ることができる。

イ 「ジリツ」には二つあり、特に重要視されるのは、「ゆだねる」ことができるかどうかである。
ウ 「何かができる」というのは、勉強ができることだけではなく、それぞれの得意分野における活躍も指している。

エ どのような場面でも「ゆだねる」ことができるように、人との信頼関係を築くことが不可欠である。

問十 本文中の「自律」の定義を踏まえて、あなたにとっての「自律」だと考えられることを、自身自身のこれまでの経験に照らし合わせて八〇字以上一〇〇字以内で述べなさい。ただし、二文で述べること。

二

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

文化祭が終わると、教室内の空気は十二月の新人戦に向けて緊張感を高めていくようだった。夏の大会ではまだ出場できなかった一年生の中にも、新人戦なら活躍できる子が出てくる。マチたちの科学部は関係ないが、運動部の子たちはみな、忙しそうだった。

放課後の教室にも、部活の話題が増えていた。運動部の子たちの顔が心なしこうかんか興奮こうふんして見える。大変そうだけど、楽しそうだ。

そんな中、ジャージに着替えたみなみがすまなそうに話しかけてきた。

「マチ、^①今日のことなんだけど……」

科学部に行くしたくをしていたマチは、すぐにピンときた。夏休みに約束して以来、マチとみなみは高坂こうさか紙音しおんの家を一緒に訪ねる機会が多くなっていた。お互いに部活がある日を選んで待ち合わせるのが当たり前になっていたので、今日も紙音の家に一緒に行くつもりだった。

みなみが言った。

「紙音のところ、今日は私一人で行くよ。陸上部、新人戦前でみんな張りきってるから、科学部よりも終わるの、遅くなると思う」

「そうなんだ」

「うん。——紙音の家に行くのも、今日はだいぶ遅くなっちゃうんだけど」

文化祭の合唱練習の間も、みなみとマチは紙音の家を何度も訪ねた。しかし、応対に出てくるのは最初の日と同じように、いつでも紙音のお母さんだけだった。

一学期の最初、マチの制服のしつけ糸を切ってくれたあの子は、今、一人きりの部屋で過ごしているのかもしれない。そう考えると、胸の奥がきゅつとなる。

「私、一人で行こうか」

マチが言うと、みなみがびっくりしたように「え」と眩くらいた。

「高坂さんの家なら、何度もみなみちゃんと一緒に行ったし、私一人でも大丈夫だよ。みなみちゃん、新人戦の準備で忙しそうだし、明日も朝練があって早いんでしょ？」

「そうだけど、マチを一人で行かせるのは悪いよ。遠回りになるし」

みなみが断りかけたとき、思いがけず、背後から「私、行くよ」という声がした。振り返って、驚く。

琴穂ことほだった。

^②マチとみなみは思わず顔を見合わせる。そんな二人に向け、琴穂がさらに続けた。

「私がマチと一緒に行く。今日はバスケット部、陸上部ほど遅くならないと思うから、ちょっと待ってて

くれば大丈夫だよ。私にまかせて、みなみは部活に行つて」

「助かるけど、でも」

みなみの ^A 声を遮るように、琴穂がすばやく首を振り動かしした。

「みなみってさ、しつかりしてるのはいいんだけど、一人でたくさんのかか抱えこんでがんばりすぎるんだよね。そんなんじゃ、いつか参っちゃうよ。——今年の新人戦、陸上部の他の子に聞いただけで選手になれそうなんでしょ？」

みなみの顔にはととした表情が浮かぶ。琴穂がふう、と小さなため息をついた後で笑った。

「だったら、今はそっちががんばり時だよ。もっと頼つてよ。——これまで副委員長なのに全然頼りにならなかったのは、私が悪かったからさ」

言いながら、琴穂がマチを見た。「マチに仕事、だいぶ頼っちゃってたし」と決まり悪そうに告げる。

「マチも、これまで、いろいろごめんね。私、部活を言い訳にしすぎてた。そんなこと言い出せば、みなみだって陸上部が大変なのに、委員の仕事したり、高坂さんの家、行ったりしてたんだもんね」
謝った後で照れくさそうに目を伏せた琴穂の前に、みなみがとまどうような表情を浮かべる。ややあつてから、^B おずおずと「いいの？」と琴穂を見た。

「頼んでも、平気？」

「うん」

琴穂が胸を張つて頷いた。

一連のやりとりを驚きながら見ていた ^③ マチの頬がゆるんでいく。^{ほお}「ありがとう」とためらいがちにお礼を言うみなみを、とてもいいと思った。

《 中 略 》

琴穂と二人で紙音の家に向かう途中、マチは改めて琴穂に礼を言った。

「さっきはありがとう。みなみちゃん、嬉しかったと思う」

横を歩いていった琴穂が、「だって」と笑う。

「みなみ、完壁かんぺきすぎるんだもん。あれ、本人何でもないふうにやってるけど、結構大変なはずだよ」

「私も実はちよつとそう思ったことがあったけど、言い出せなかったんだ。琴穂が言ってくれてよかった」

「うーん。みなみ、たぶん、自分が無理してることに気づいてないんじゃないかなあ。自分のことって、かえってなかなか気がつけないよね。私もそうだったし」

琴穂が「ごめんね」と頭をかく。

「私も合唱の練習、リーダーなのにちゃんとやってなかった。マチに注意されてはとしたの」

「私こそ、^④ あのとときはキツイこと言っちゃってごめん」

あわてて謝ると、琴穂が「そう？」と首を傾げた。

「全然キツくなかったよ。むしろ普段おとなしいマチから言われるなんて、私、よっぽどだったんだなって反省した。――^⑤ なんか、ありがとね。陰でこそ言うんじゃないくて、面と向かって言ってくれたから、かえって気分よかったよ」

「そんな……」

頬がかあつと熱くなった。

X

今年の四月、マチが中学校に入学するにあたって目標にしたことだ。その一歩が踏み出せたようで胸の奥がじん、とあたたかくなる。

琴穂から本音の声を聞いたように思えたら、マチもまた、その本音にこたえなくなる。自分のことについて話してみたくなった。

「私ね、＼いい子＼とか、＼真面目＼って言われるの、少し嫌なんだ」

今も、琴穂から「普段おとなしいマチ」と言われたばかりだ。おとなしい、優しい、いい子。褒め言葉なのに、マチを息苦しくさせる言葉たち。琴穂がびつくりしたようにマチを見た。

「どうして？」

「自分の意見がはつきり言えない子だとか、面白くない、楽しくない子なんだって周りから思われているようで、心配で」

話しながら、だんだんと胸のつかえが取れていく。絶対に人には話せないと思っていたことだったのに、^⑥ 言葉に羽が生えたようだった。琴穂は相変わらず驚いていたが、聞き終えて大きく息を吐き出した。

「ごめんね、私、マチのことたくさん＼いい子＼って言った。褒め言葉のつもりだったんだけど無神経だったね」

「ううん。私が気にしすぎるのも確かだから」

「勉強できる子は、悩みなんかないと思ってた。私、マチのこと羨ましかったんだ」

「ええっ？ 私こそ、琴穂は運動神経もいいし、友達も多いから悩みなんかないと思ってた」

^⑦ お互いに驚いたものの、いつの間にか、一緒に笑っていた。

（辻村深月『サクラ咲く』）

問一 ―― 部A「声を遮るように」・B「おずおずと」の意味としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

A「声を遮るように」

- ア 相手の声よりも一回り大きな声で イ 相手の言葉を理解したくないかのように
ウ 相手に最後まで話させないように エ 相手が話しているのを無視するように

B「おずおずと」

- ア しりごみするように イ 照れくさそうに
ウ ありがたそうに エ 困ったように

問二 ―― 部①「今日のこと」とあるが、その内容としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今日是一緒に帰る時間が遅くなってしまったということ。
イ 十二月の新人戦のために皆で部活動を頑張るということ。
ウ マチと一緒に紙音の家を訪問する約束をしていること。
エ 放課後すぐに高坂家に一緒に行く予定だったこと。

問三 ―― 部②「マチとみなみは思わず顔を見合わせる」とあるが、その理由としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分たちの秘密のやりとりを知らないうちに初めから終わりまで聞かれていたことに気づき驚いたため。
イ 最近まで自分のことばかりで精一杯だった琴穂が自分たちの助けとなるような発言をしたことに驚いたため。
ウ 今まで紙音の家に行ったことのない琴穂に本当に頼んでいいのかどうか分からず不安になったため。
エ 自分たちだけで行っていることに琴穂も巻き込んでしまったと感じて申し訳ない気持ちになつたため。

問四 ―― 部③「マチの頬がゆるんでいく」とあるが、その理由としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 琴穂とみなみがお互いの意見を受け入れ、お互いにとって納得のいく結論に達したことに安心したため。
イ 琴穂の申し出にありがたさを感じ、ずっと言いたかったことを言える機会を得られたことがうれしく感じたため。

ウ 琴穂とみなみがお互い協力しあって、それぞれがうまくいくように気遣っていた姿を見られたことを頼もしく感じたため。

エ いつもしっかりしているみなみが琴穂の申し出を受け入れ、自分たちを頼ってくれたことをうれしく感じたため。

問五 ―― 部④「あのとき」とあるが、いつのことか。「〽のとき。」に続く形で本文中から八字で抜き出して答えなさい。

問六 ―― 部⑤「なんか、ありがとね」とあるが、このように述べた理由としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分のことで精一杯で、行事の際にはリーダーであったのにもかかわらず役割を果たそうとしていなかったことに対し、マチは自分のいないところで悪口として言うのではなく直接注意をしてくれたから。

イ 自分の部活動にのみ情熱を注いで、クラス全体の行事に協力していなかったことに対して、周囲から冷ややかな目で見られる前にマチは協力した方がいいとそれとなく教えてくれたから。
ウ 部活動で心配なことがあり、学校の行事になかなか前向きに取り組めなかったことに対し、マチもクラスの皆と同じように、いくら心配事があってもクラスメイトの一員として協力はすべきだと感じてくれたから。

エ 何事も全力で頑張ってしまう性格のため、クラスメイトから自分への期待に応えられない状況を苦しく感じていることに対し、マチがもっと自分らしくふるまった方がいいと励ましてくれたから。

問七 空欄 X にあてはまる表現としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア はっきり自分の意見が言えない性格を直したい

イ いつでも取り乱すことなく友人と接していきたい

ウ 人が困っていたら手を差し伸べられる人になりたい

エ “いい子”とか“真面目”に見られないようにしたい

問八 — 部⑥「言葉に羽が生えたようだった」について次の各問いに答えなさい。

- (1) ここで用いられている表現技法として正しいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 擬人法 イ 直喩 ウ 隠喩 エ 体言止め

- (2) この部分の説明としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア これまではどんな友人にも言うつもりはなかったことだったが、言い始めてみると自然と言葉が出てきた。

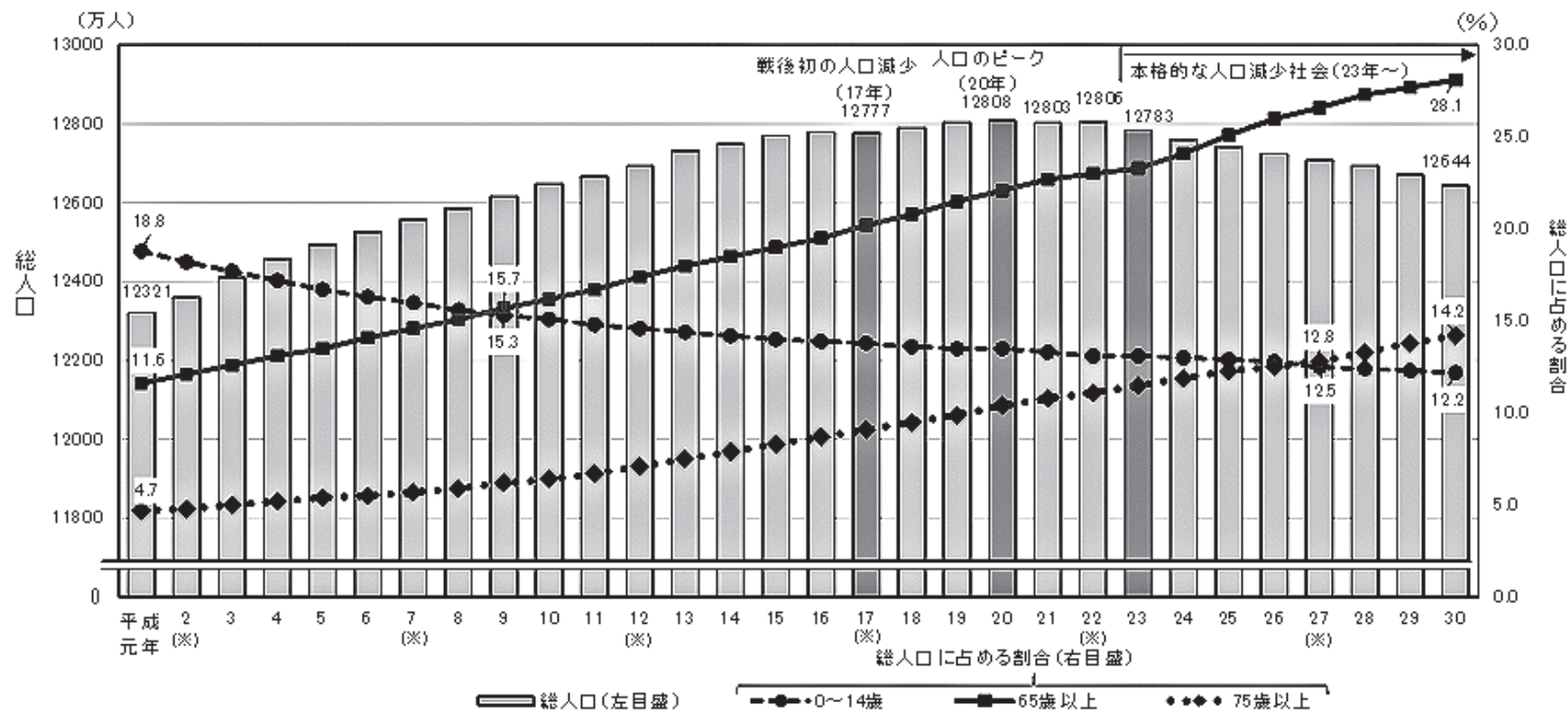
イ 友人関係を損ないかねないので言うてはならないと考えていたが、言い始めてみると関係が損なうことはなかった。

ウ いくつか言わないとならない内容をこの場で思いきって話してみると、思っていた以上に気が楽になった。

エ これまで自分の抱えていた考えではあるが、話し始めると自分の意思では抑えられなくなった。

問九 — 部⑦「お互いに驚いたものの、いつの間にか、一緒に笑っていた」とあるが、それはなぜか。本文中の言葉を使って五十字以上六十字以内で説明しなさい。

次のグラフは総務省統計局から発行された平成の日本の人口についての推移である。これについて、あとの問いに答えなさい。



出典：「総人口及び総人口に占める 0～14歳、65歳以上及び75歳以上人口の割合の推移（平成元年～30年）」（総務省統計局）

問一 平成元年の七十五歳以上の割合は総人口の何パーセントか。

問二 平成九年の情報として読み取れるものを、次のア～クの中から二つを選び、記号で答えなさい。

ア 七十五歳以上の人口は六十五歳以上の人口の半分未満である。

イ 平成を通してみても最大の人口増加率である。

ウ 総人口に比べて二十パーセントの人口の変化があった。

エ 八十歳以上の人口は十二歳の人口より少ない。

オ 六十五歳以上の人口は二千万人を超えない。

カ 人口が一億二六〇〇人を突破した年である。

キ 平成元年と比べ、十四歳以下の人口が五ポイント程度減少した。

ク 将来における人口減少が予測されるようになった。

問三 「七十五歳以上の人口」が「十四歳以下の人口」を超えたのは平成何年か。

問四 次の文章は平成二十四年に内閣府から発表された「高齢社会白書」の一部である。この文章を後のようにまとめたときに、空欄（①）～（④）にあてはまる言葉を指定された字数で本文中から抜き出して答えなさい。

従来であれば支えられる側と一律に捉えられていた人々のなかでも意欲と能力のある六十五歳以上の者には、その活躍^{かつやく}を評価するなどして、できるだけ支えてもらい、世代間のバランスを確保して社会のバランスを保つ必要がある。

さらに、世代間格差のみならず、高齢者の間の所得格差、つまり世代内格差は、他の年齢層に比べて大きいように、拡大している。

社会保障制度は、全世代に安心を保障し、国民一人ひとりの安心感を高めていく制度である。年齢や性別に関係なく、全ての人が社会保障の支え手であると同時に、社会保障の受益者であることを実感できるようにしていくことが、これからの課題である。

（内閣府『平成二十四年版 高齢社会白書』概要版）

現代は国民全体に対する高齢世代の割合も高く、また、高齢者世代内の格差も他の年齢層に比べて大きい。この点から（① 6字）について考えた場合、これまでは高齢者は全て（② 6字）と見なされていたが、それだけではなく、世代や年齢、性別に関係なく、お互いが（③ 3字）でもあり利益を受ける側でもあるという意識を持って、社会の（④ 4字）を保つていく必要がある。